

ドストエフスキー・ノート(2)

中村 健之介

ドストエフスキーとイギリス

1. ドストエフスキーとイギリスの比較文学

「ドストエフスキーとイギリス」というと、比較文学の畑ではシェークスピア、ディケンズ、ギャスケル夫人、アン・ラドクリフ、マチュエリンなどの文学とドストエフスキーの関係の研究、つまりドストエフスキーが自分の創作に生かしたイギリスの作家たちについての研究がまずある。

ディケンズとドストエフスキーとの関係については、たとえばラリーの『ドストエフスキーとディケンズ』、カタルスキーの『ロシアにおけるディケンズ』。

スターンやバイロンやディケンズなどのイギリスの文学は、ドストエフスキーだけでなく十九世紀のロシア文学の形成を大いに助けた。スターンの『トリストラム・シャンデイ』とゴッリの『鼻』については、ヴィノグラードフのすばらしい論文

がある（中村健之介「ゴッリの『ネフスキー大通り』参照」。バイロンとレールモントフについてはエイヘンバウムの名著『レールモントフ』がある。

それから、ドストエフスキーの小説がイギリスの作家たちの間でどう受け入れられたか。二十世紀初頭、コンスタンス・ガーネットによる英語の翻訳が出るのと平行してイギリスに「ドストエフスキー・カルト」が起きる。ミドルトン・マリイ、その妻のキャサリン・マンズフィールド、D・H・ロレンス、ヴァージニア・ウルフ、少し下って歴史家のE・H・カーなどなどの、ドストエフスキーに対するイギリス人の反応を調べた研究がある。その方面のことを知りたい人には、レザバローが編んだ論文集『ドストエフスキーとブリテン』が便利。

ドストエフスキーに対するコンラッドの反応もそこに加えることができる。『西欧人の眼に』(Under Western Eyes. 1911)は、ドストエフスキーとの関わり（特に『未成年』との関わり）が濃厚である。

『宝島』で有名なロバート・ルイス・ステイヴンソンが、ドストエフスキーの愛読者だったということは、興味深い。私は高校生のころ中島敦の『光と風と夢』が好きだった。『ジキル博士とハイド氏』や『マーカイルム』には、明らかにドストエフスキーのゴリヤートキン、ラスコーリニコフ、イワン・カラマーゾフと共通の精神分裂の劇が見られる。『マーカイルム』の、殺人の現場へその家の女中がもどってきて犯人と出くわすあたりは、『罪と罰』がヒントになったのだろう。

2. イギリスへの旅

しかしこれは、そういう比較文学の話のための「ドストエフスキー・ノート」ではない。ドストエフスキーのイギリス旅行について、頭に浮かぶことをあれやこれやメモしておきたい。「ものしり」にはなれない者の備忘録。

ドストエフスキーの西欧旅行の約九〇年前、エカテリーナ大帝によって「貴族の自由」という貴族の特権が承認されて、一七七〇年代あたりからロシアの貴族は自由に外国旅行に出かけられるようになり、それからロシア貴族はヨーロッパ旅行に熱心になる。十八世紀末、十九世紀初めはイギリスにまで行くロシア人が結構いたのでそうである。しかし、だんだんイギリスよりはフランスが「人気」になっていったという。

十九世紀中頃になってもロシアの貴族知識青年はヨーロッパ

へ旅するのが「教養教育」の一環だった。閉鎖的なニコライ一世時代（一八二五〜一八五五）とそのあとの開放政策のアレクサンドル二世時代（一八五五〜一八八一）では大分ちがうが、閉鎖的な時代でも、ヨーロッパへの門は閉ざされていたわけではない。ドストエフスキーの親友のアポロン・マイコフもニコライ一世時代に一年間、イタリア、フランスをまわっている。青年時代のドストエフスキーの兄貴格だったニコライ・スペシネフも、一八四〇年代に四年近くもヨーロッパ各地で暮らしている。

ドストエフスキーもイタリアへ行ってみたかったらしい。四〇歳になって『ペテルブルグの夢』というエッセイで、若い頃を振り返ってイタリアに夢中だったと言っている。しかしドストエフスキーは二八歳から三八歳までシベリアの懲役監獄や軍隊に入っていた。ロシアの外どころか、首都ペテルブルグへも出てくることもできなかった。

解放帝アレクサンドル二世の時代になって、一八五九年の末にシベリアから首都へ帰ってきて、その二年半後、四〇歳になってようやくヨーロッパ旅行の夢が叶う。一八六二年の夏、ロシア暦の六月七日から八月二四日まで二ヶ月半ほどの旅である。パリに約一ヶ月いた。

この旅行のとき、生涯にこのとき一度きりだが、六月三〇日（ロシア暦）から八日間、ロンドンを訪ねている。イギリスはまさにヴィクトリア朝の盛期。

3. 鉄道と産業社会化

ロシア暦の六月七日、グレゴリオ暦の一九日、朝八時にペテルブルグを出発した。汽車である。

ロシアの鉄道は一八三〇年代の首都ペテルブルグとそのすぐ南の避暑地パーヴロフスクの間を結ぶ二四キロのツァールスコエセロー（皇帝の村）線からはじまる。

一八三七年、一六歳のドストエフスキーは学校に入るために故郷のモスクワからペテルブルグへ向かった。そのときはまだ馬車だった。約一週間かかっている。それが五年にペテルブルグ・モスクワ間に鉄道ができたおかげで、一四時間で行けるようになる。

トルコ、イギリス、フランスを敵にまわしたクリミア戦争（一八五三～五六）で、ロシアの南下政策は挫折した。この戦争で、鉄道がないと人も物も輸送ができないから戦争に負けるということがわかって、五〇年代後半からは、国家の力で鉄道網が広がる。ロシア中央鉄道会社が設立された。戦争では敵側だったイギリス、フランスの資本が入ってきた。中央鉄道会社の主要役員は外国の銀行家たちである。国は莫大な鉄道公債を発行し、幹線の建設にかかる。技術も外国に仰がねばならない。鉄道建設の技師はフランス人、イギリス人が主だった。

鉄道だけでなくさまざまな土木工事にイギリス人が招かれていた。一八七三年のレスコフの小説『お困りのご様子』には、

ロシアの地方都市の大規模な架橋工事が書かれている、工事の監督官はイギリス人技師である。ドストエフスキーの小説に最初に現われるイギリス人は、『虐げられた人たち』のエレミア・スミス老人だが、このスミスも機械技師。スミスの技師としての活躍が書かれているわけではないが、イギリス人技師というのがわかりやすかったのかもしれない。

船と馬車と櫓しか知らなかった（河川が輸送の大動脈だった）ロシアの農民たちにとって、鉄道の出現は大事件であった。古い世界観の中へ突入してきた新しい怪物だった。

イギリスでも、産業革命の一八三〇年代、「真黒な煙と火の粉を吐いて猛烈に突走る悪魔さながらの機関車に迷信的恐怖を感じた者も大勢いた」という。イギリス人ディケンズには「無生物が生物として扱われる」アニミズム的発想があつて、怪物めいた汽車のイメージが生まれたという。

ロシアもまだ宗教的世界観が濃くただよっている広大な農村的社会だった。アニミズム的発想もつよい。農民の目には、火と煙と蒸気を吐いて平原を突進し森をくぐりぬけておしよせてくる巨大な黒い鉄の馬は、「ヨハネ黙示録」（九の一七）に現われる「頭はライオンのようで、口から火と煙と硫黄を吐く」馬のように見えたという。農民たちは教会で「黙示録」のイメージに慣れ親しんでいた。

ドストエフスキーも『白痴』でレーベジェフに、ヨーロッパ

から広がってきた鉄道網は黙示録で語られていた巨大な燃える星「にがよもぎ」(チェルノブイリ)なのだと言らせている。

プーシキンの叙事詩『青銅の騎士』(一八三三)は、皇帝ピョートルが大建設事業をなし、そのために庶民が苦しむという話である。一八七〇年代になると、その『青銅の騎士』を下敷きにし、いま皇帝が建設する鉄道が「しがない者」を苦しめているのだ、という鉄道建設解釈が生まれる。死んでいった人々の亡霊が鉄道にむかってうらみを言う、そういう詩も書かれた。

一八五〇年代後半から盛んになったロシアの鉄道建設は六〇年代、七〇年代になっても勢いが衰えない。失敗、挫折も多く、後になると、国はペテルブルグ・モスクワ線を民間に売却して資金を作るといふようなこともしているが、それでも国内各方面に鉄道網が広がり、同時にヨーロッパとも鉄道でつながっていった。

ドストエフスキーの『白痴』(一八六八)の冒頭は、ワルシヤワ・ペテルブルグ線の列車の場面である。『白痴』には、列車が衝突して、雪の荒野のなかで五日間も立ち往生した話が書かれている(第三編)。実際に起きたロシアの鉄道事故だそうである。

これまで、ウラルなどの工業地帯では早くから農民が特別のパスポートを与えられて工場労働者として働いていたが、それ

は少数であった。大多数の農民は土地に縛りつけられており、金持ちが産業を興そうとしてもおいそれとは労働力は集まらなかった。国民の九〇パーセントを占める農民は、「近代化」から遠いところで暮らしていた。一八四二年のゴゴリの『死せる魂』(魂とは農奴のこと)は、死んだ農奴の戸籍を買い集めて、情報のとどかない遠い地方で「生きている農奴」の戸籍として売る詐欺師の話である。情報が走らず人が移動しなかったから、そういう詐欺の話も成り立ち受け入れられた。

それが、一八五四年のクリミア戦争の敗北後、国全体が動き出した。一八六一年、アレクサンドル二世による農奴解放が、なにはともあれ実現した。鉄道網の爆発的拡大が起きたこの激変の時代に、自給自足的反復的農業社会だったロシアは、後戻りのきかない産業社会へと大きく変貌していった。産業と都市が社会を率いる力となっていった。ゴンチャロフの『オブローモフ』は、一八五九年の作品である。『オブローモフ』の中には、動くことは良いことなのか、変わってゆくことは幸福なのかというロシア人の切実な自問である。中の一節「オブローモフの夢」は、反復の農村生活こそ幸福ではなかったかと過去を振り返る夢である。

ドストエフスキーの長編小説群は一八六〇年代以降のロシア社会を書いている。社会の土台も柱もすべてが不安定であり、すべてが不気味に揺れ動いている。一八七一年のドストエフスキーの『悪鬼ども』では、地方都市にまで九〇〇人くらい

の労働者をかかえた工場ができてストライキが発生している。農民は賃金労働者になっており、貴族も不安げに動き回っている。「このごろは、貴族も平民も区別がつかない」(『罪と罰』)。

鉄道建設ブーム、産業社会化、農民の工業労働者化の波は、ロシアの経済だけでなく人の心にまで測り知れない影響を与えた。一八七〇年代のロシア上流社会を描いたトルストイの『アンナ・カレーニナ』(一八七五)では、いわば時代の巨大スターとなった鉄道が舞台装置となっている。そしてその登場人物たちは、鉄道建設の利権や「これまでのように働くことの意味」をめぐる長い議論をしている。巨大な外国資本も入ってきて投機が目の前で大金を生むものだから、では汗水流して牧草を刈る労働とは一体何なのかという疑問が生じたのである。主人公リョーヴィンは時代の流れに逆らって必死に牧草を刈る。

同じ一八七五年に書かれたドストエフスキーの『未成年』のテーマも、同じである。農奴の女から生れた青年アルカージーが、労働しないで金を儲ける方法を考え、食費を削って貯めた小金で小さな「投機」に手を出す。『白痴』のガーニャ・イヴォルギン、『カラマゾフの兄弟』のラキーチンもそうだが、ドストエフスキーの後期の小説では、自分が凡才であることを知っていて少しでもうまいめしを食べようとする青年たちが、労働しないで金を手にする方法を見つけようと頭をし

ぼっている。

4. ロシア人貿易商

そういうわけで、ドストエフスキーのイギリス行きは、できたばかりのペテルブルグ・ワルシャワ線の汽車の旅である。プスコフ、ワルシャワ、ポズナニ、ベルリンと西へ向かう。ペテルブルグからベルリンまで四六時間かかっている。一八六二年六月九日(新暦二一日)にベルリンに着き、それから、途中ヴェイスバーデンで降りてルーレット賭博をやって、パリの北駅に降り立ったのは六月一六(二八)日の朝だった。

このヨーロッパ旅行についてドストエフスキーは『夏の印象をめぐる冬の随想』というエッセイを書いている。その第二章「汽車の中で」に、同じコンパートメントに乗り合わせた乗客のことが書かれている。

「わたしの向かいの席は夫婦者が座っていた。もうかなりの年配の地主で、見たところ好人物らしい。夫婦はロンドンの博覧会(一八六二年五月から一〇月までロンドンで開催された第二回万国博覧会)へ馳せつける途中なのだ。……

わたしの右となりには、一人のロシア人が席を占めていた。これはもう一〇年もロンドンに住みついて商業にたずさわっている男で、今度ほんの二週間だけ、商用のためにペテルブルグ

へ行ってきたのである。……

左手には正真正銘の英国人が座っている。赤毛を英国式に分けた、むやみにまじめな男である。かれは道中ずっと、車内のだれとも、どの国のことばでも、それこそただの一言も話さず、昼の間はなにやらちっぽけな本―英国人が便利だといって自慢しているけれど、かれら以外はだれにもとても我慢のできた代物ではない、あの英国独特の実に小さな活字で印刷された本―を、読み続け、夜は一〇時になると、すぐさま靴を脱いで、スリッパに履き替えるのである。おそらく、生れてこのかた、ずっとそういうやり方を続けてきたので、たとえ汽車の中といえども、その習慣を変えなくなつたのだろう」(『三〇巻本ドストエフスキー全集』第五卷五二ページ。以下⁵²頁以下のかたちで示す)

右どなりのロシア人商人だが、もう一〇年もロンドンに住んでいるという。ロンドンに事務所をもっている。

大方のロシア史の研究書には、この時代のロシアは農業国で、ロシアの大金持ちというのは大地主のことだ、ロシアの商人階層は頭がかたくて暗くて外国嫌いだ、と書かれている。だからロンドンで商売をしているロシア人がドストエフスキーのとなりに座っていると聞くと、はっとする。

農業国ロシアにだって、貿易商がいなかったはずがない。そして英語を話しロンドンに事務所をかまえているロシア商人もいたにちがいないのだ。

ロシアからの輸出は、むかしから亜麻、木材、さらに粗鋼(crude iron)や^{raw}raw materialsが、バルト海沿岸からイギリスへも輸出されていたという。十八世紀末になると、ロシア帝国は南へ版図を広げたため、黒海、アゾフ海を通じてのヨーロッパへの穀物輸出が貿易の中心になっていった。一八八七年のロシアの全輸出収入の八一・五パーセントが農産物輸出によるものだという。ロシア革命前までロシアは断然穀物の輸出国だった。また、鉄道でヨーロッパとつながり、陸路の輸出入がさかんになる。

十八世紀後半のエカテリーナ大帝時代は、フランスからの贅沢品の輸入が多かった。十九世紀に入るとイギリスからの工業製品の輸入がふえる。十九世紀後半、一八七〇年代前半では、ロシアの輸出輸入の相手はイギリスが「最大手」である。その後は統一をなしたとげたドイツがトップに立つ。フランスは総額ではその間ずっと三位。

一八六二年六月、ドストエフスキーと並んですわっている男は、ロンドンで商売をしている。機械の輸入かもしれない。穀物の輸出かもしれない。ただ、この男が大きな貿易会社を経営している感じはしない。個人で商売をやっているのではないだろうか。

★ロシアの商人

この時代のロシアの都市住民としては、地主、聖職者、農民

(農民もたくさん都市に流れ込んでいた)の他は、商人、町人、職人という身分の者たちだった。商人は工場経営、卸売業、小売業、町人は零細の小売業、小規模な製造業、職人は労働者である。登録料を払えば、毎年一月と二月に、ある身分から抜け出して他の身分に移ることが可能だった。

商人は金を払ってギルドに属するのだが、大きな企業家が育たないように制度ができていた。商人は、都市でいろいろと無償で国に奉仕するようになっていた。だから多くの商人は、財産ができる、商人身分から離れて安定した地主身分へ移ろうとした。商人は、有能な息子は軍人か官僚になるように教育した。政府は商人に「名誉市民」などの称号を与えて商人身分からの人材の流出を防ごうとしたが、うまくいかなかった。こういうことはドストエフスキーの『白痴』を読むとわかる。パルフォン・ロゴージンは商人の息子だが、無能なので教育は受けさせてもらえず商人身分にとどまる。

5. ロシアとイギリスの通商のはじまり

イギリスの東インド会社 (East India Company) ができたのはちょうど一六〇〇年、その五〇年前、一五五三年にイギリスとロシアの直接の接触がはじまる。その年の八月、中国への新しい航路を探すイギリスの商船が北極海回りでロシアの白海にそそぐドヴィナ川の河口ホルモゴールイに着いた。これを率

いていたのがリチャード・チャンセラー。

もちろん以前から往き来はあった。ロシア北部の海岸の町では、ノルマン人の作ったコインが見つかるそうである。イギリス側の史料としては、九世紀から十三世紀のさまざまな文献にロシアのことは出ているとのこと。ロシアの古い年代記で「ヴァリヤーク (Varangians)」と呼ばれるのは、九世紀頃のノルマン人である。

しかし公式な接触のはじまりは十六世紀半ばからとなっている。

一五五三年というと、かの有名なイワン雷帝 (イワン四世) の時代である。チャンセラーはモスクワにやってきて通商を求める。イワン雷帝はイギリス人を歓迎した。もちろん商人はイギリス商人だけではなく、オランダやハンザ同盟のいろいろな都市の商人もモスクワに入っていた。

五五年にイギリスへ帰ったチャンセラーはアン女王から勅許状 Charter を受けた。ロンドンに「モスクワ公国会社 (Muscovy Company)」が設立された。チャンセラーは他の有能な商人たちと一緒に再度モスクワへ向かった。かれは間もなく死んだが、会社はロシアから輸出税免除などの特権が与えられて、商売繁盛、どんどん利益をあげた。

その時代には、イギリスからは主に布地がロシアに入ってきた。それから砂糖、紙、医薬品、武器なども。それから、イギリスのいろいろな技術者、医者、薬剤師などがモスクワへやっ

て来た。ロシアからは、亜麻、木材、毛皮、獣脂などが出ていた。

6. イワン雷帝とエリザベス一世

イギリスでは一五五八年に、エリザベス一世が即位する。イギリスとの間に外交関係をひらいたイワン雷帝は、ジェンキンスというイギリスの使節にエリザベス女王宛の手紙をもたせた。イワンはイギリスと同盟関係を結びたいと言ってやった。つけ加えて、自分が臣下に裏切られて身が危くなったときはイギリスに避難させてもらいたい、その代りイギリスで反乱が起きたときには女王をモスクワのクレムリンにかくまうてやる、と書いた。

何度かやりとりがあつたが、イワン雷帝は自分の同盟の申し入れをエリザベス女王が無視しているので、怒って、エリザベスにこう書き送った。

「われらは、汝が己の国の君主であつて、自ら支配し、自ら君主の威厳と国家の利益に配慮していると考えていた。……だがどうやら実際には、汝の国では他の者どもが、汝をさしおいて支配しているようだ。他の者というだけではない。粗野な商人どもが支配しているのだ。この者どもは、われら君主のことも、われら君主の名譽も、国益も考えずに、ただ己が商いの利

益のみを追い求める輩なのだ。汝は月並な娘のように、初心な処女のままにいるのだ」(栗生沢猛夫訳)

自分たちはイギリスの商品などではなくても十分暮らしてゆけるのだ、だからこれまでのモスクワ公国とイギリスの間の通商のとりきめはすべてご破算にするなどと、おどしまがいのことも書いている。

エリザベス一世は少し驚いたのかもしれない。彼女は、関係修復の手を打っている。

イワン雷帝は、美人のイギリス女性と結婚したいという気持ちをもっていた。その交渉のためにピーセムスキーという家臣をイギリスに派遣していた。そして女王の親戚にあたるメアリー・ヘイスティングス (Mary Hastings) が候補にあがり、ピーセムスキーはヘイスティングスの容貌をくわしく書きとめた。イワンには七人目にあたる妻がいたが、ピーセムスキーは主君イワンから「もし妻の件でイギリス側からクレームがついたら、主君は現在の妃をしりぞける。また、そのイギリス女性との間にこどもが生まれたなら、そのこどもに、王位継承権以外のあらゆる資格を認める、そう答えよ」と命じられていた。しかし、この国際結婚は実現せず、イワン雷帝は一五八四年、急死した。その少しあと、ちょうど一六〇〇年頃にロシアの支配者になるボリス・ゴドゥノフも、イギリス王室との婚姻関係を望んだが、これも実現しなかった。

イワン雷帝は、有能なイギリスの商人や外交官に会って何かを感じたのだろう。異常に猜疑心のつよいイワン雷帝が危機に瀕したら逃げる先はイギリスにするというのだから、イギリスは信用できると感じたのかもしれない。後で書くだろうが、ドストエフスキーも、フランス人は挙措の端正な金の亡者、イギリス人は泥棒だが紳士、だからイギリス人は信用できる、という思い込みである。

7. イギリス好きになったロシア外交官たち

外交官にもイギリスびいき、Anglophileが結構いた。外交、国の運営については、いろいろな面でイギリスが手本になるという感じが、ロシアの上層の実務にたずさわる人々の間に生まれてきたような感じさえする。

ボリス・ゴドゥノフの時代、一六〇一年から、一八人の若いロシア人が西欧に派遣された。そのうち四人がイギリスへ送られた。かれらは英語を学び、イギリスの学校で正規の教育を受けた。これがイギリスとロシアの深い交流を築くはずの人材だったのだが、ゴドゥノフが死に、ロシアが混乱に陥り、留学生たちはヨーロッパに置き去りにされた。一六一三年になってロシア側がイギリスのジェームス一世に問い合わせた。一人だけその後がわかって、英国国教会の聖職者になっていたという。三人のその後はわからなかった。

十八世紀の、諷刺詩人としても有名なカンテミール（一七〇八〜四四）は、イギリス大使を務め、ロンドンに長く住み、イギリス人とも交際した。かれはジョン・ロック（一六三二〜一七〇四）を尊敬して自作にもロックの考えを採り入れた。

有名なアングロフアイルとしては、十八世紀後半の、イギリス大使クラークン、そしてヴォロンツォフ兄弟がいる。兄のアレクサンドル・ヴォロンツォフ（一七四一〜一八〇五）は「イギリスに生まれたかった」とまで言っている。この兄弟はアダム・スミス（一七二三〜九〇）の『国富論』をはじめさまざまなイギリス人の著作をロシアへもたらした。

弟のセミヨン・ヴォロンツォフ（一七四四〜一八三二）は四七年間もイギリスで暮らし、ロンドンで亡くなった。かれはたえずロシアの友人たちに手紙でイギリスの政治制度をはじめとするイギリス情報を送り続けて、エカテリーナ時代のロシアの知識人の間にイギリス派ともいべき人脈を形成した。

8. ドイツ人（外国人）居留区

ロシアと西欧との接触といえば、だれもがモスクワ郊外の「ドイツ人居留区」（nemetskaya sloboda）のことを言う。ロシアへ移住してきたドイツ人はイワン雷帝の時代から、つまり十六世紀後半からすでに、そこに小さなコロニーをつくっていた。ヨーロッパ人町である。モスクワの人々はそこで外国人の

衣服や家具や楽器などを見た。そしてそれをまねて自己流にこしらえてみたりした。

当時まだロシア人は自分で書物を著すということはしていなかったという。著作はごく少数の聖職者の仕事だった。

一五五〇年から一七〇〇年まで、つまりイワン雷帝の時代からピョートル大帝の時代までにロシア語に訳された西欧の世俗の書物はわずかに一三四点。ラテン語、ドイツ語、ポーランド語などからの翻訳だが、その大半は十七世紀の後半に訳されたものである。翻訳したのはドイツ人居留区のドイツ人である。

その頃のロシア語の語彙には、西欧の単語に相当する単語がないという場合が多かった。

9. ピョートル大帝と外国人居留区

ピョートル一世（大帝）の時代は一七〇〇年をはさんで前一〇年間と後二五年間である。

ピョートルが少年時代をすごしたプレオブラジェンスコエ村（「主の変容」村）は、モスクワ近郊のドイツ人居留区のすぐとなりであった。西欧をのぞく小さな窓がすぐそこにあった。それはもうドイツ人だけの町ではなく、フランス人も、イギリス人も、オランダ人も、イタリア人も住んでいた。職業も、医師、薬剤師、商人、手工業者、建築家などさまざま。カルヴァン派の教会が二つ、ルーテル派の教会が三つ、学校もいくつあつ

た。当時ロシア人の住まいは木造がほとんどだったが、ここには石づくりの家もあった。

好奇心のつよいピョートルは少年の頃からこの外国人町に入りし、その外国人とつきあっていた。皇帝になってからも公然とここに入りし外国人たちと一緒に食事をし、ドンチャンさわぎをやっていた。友人もできた。

はやくからピョートルの親友となった者に、パトリック・ゴードンというスコットランド人がいる。花火づくりが得意で、花火をあげてピョートルを喜ばせていた。このスコットランド人は後にロシア軍の將軍になった。

ピョートルの母ナターリヤ・ナルイシキナも、ロシアへ移住してきたスコットランド人の子孫である。彼女は一般のロシア貴族女性と違って、ヴェールもかぶらずに外を歩き、幌なしの馬車に乗っていた。

ピョートルのまわりには、一六四九年の清教徒革命のあと、ロシアに移住してきたスコットランド人がたくさんいた。かれらは身分あるロシア人たちと結婚し、その子孫は後々までロシアで活躍することになる。

10. ピョートルの西欧視察研修旅行

ピョートルの西欧視察旅行（一六九七年三月～一六九八年七月）はよく知られている。

日本ではこの一八〇年あとに、岩倉使節団がアメリカ、ヨーロッパへ出かける。岩倉使節団は総勢約五〇人、一年と一〇ヶ月だが、ピョートル使節団は約三〇〇人、一年四ヶ月の大修学旅行である。こちらは王様自身が参加している。このロシアの王様は人並み外れた体力と、なんでも見てやろう、なんでも自分でやってみようというびっくりするほど積極的な学習意欲をもっていた。ピョートルはそういう専制君主だった。

もちろんイギリスにも行った。一六九八年の夏である。三ヶ月間、武器製造工場を見学したり、造船技術を学んだりの熱心な研修だった。宮廷のパーティには見向きもしない。二メートルをこす大男のピョートルが作業着で街をのし歩き、その後から立派な礼服の家臣たちがついてゆくという光景は、思い浮かべるとたのしくなる。イギリス政府から与えられた住まいをさんざんによごしたとか、腕力がつよい随員をボクシングの試合に出して賞金をかせいだとか、王様としては破天荒なことを次々としてかして、ロンドンっ子たちをおどろかせた。一六五〇年に創設されたばかりのフレンド協会に興味をもって、出かけて行ってクエーカーにいろいろ質問したりもした。

ピョートルは、訪問したヨーロッパの国々で技術者を雇ってゆく。イギリスでは六〇人近くも雇った。すべて技術者。やがてペテルブルグの運河づくりで活躍するジョン・ペリー、海軍学校を創設するファカーソンなどは、こういう訪問地採用のお雇い外国人である。モスクワにガラス工場を建てたのもこうし

て雇われたギリシ人技術者である。これらのお雇い外国人たちはロシアに住み着き、ロシアに融け込んでゆく。技術もその知識も用語も「人間ごと（まるごと）」ロシアに入ってきてしまう。ロシアも、いろいろな国の人間を吸収してゆくabsorbentな国であったようである。

11. 女帝中心のフランス風貴族文化

ピョートル一世の時代もそうだが、それまでずっとロシアを引いて動かしてきたのは断然男たちだった。君主とその側近たちも、君主の助言者として活躍した修道者たちも、男である。宮廷も要塞も修道院も荒々しい男たちの重苦しい世界だった。

それが、ピョートルの後、女が表舞台に立つ。一七三一年から一七九六年まで六〇余年にわたってアンナ、エリザヴェータ、エカテリーナと、女帝の時代が続く。

一七三〇年代の女帝アンナの時代はややドイツ好みが強かったようである。しかし十八世紀後半、とりわけピョートルの娘のエリザヴェータ（一七四一〜六一在位）の時代から、フランス文化が圧倒的な勢力を得ることになる。それに続くのが、エカテリーナ二世（大帝）時代（一七六二〜九六）。

そしてこの二人の女帝の五〇年間、とりわけ一七五〇年代から七〇年代、ロシアの上流階級はことばもファッションもすべて輸入フランス文化にどっぷり浸かる。フランス文化がヨーロッパ

ツパの華となったのである。一六六一年からのルイ十四世（太陽王。一七一五）、そしてルイ十五世（一七一五～七四）のフランス、絶対王政最盛期のフランスの文化は、全ヨーロッパの王侯貴族の上にいわば君臨した。とりわけロシアの上層階級はフランス文化にわれを忘れた。

ペテルブルグは北緯六〇度、アラスカのアンカレッジに近い緯度である。冬は長いし暗い。一年のうち二〇〇日は青空の見えない町である。樹木はきわめて少ないのに結構湿気もある。（現代だけのことではない。）その暗い新しい都市に、十八世紀後半、異様に明るく華やかな宮廷文化の花が開いた。

★ペテルブルグの変貌

都市の様子も変わってきた。エリザヴェータ時代（一七四一～六一）には建築家ラストレリー（V. Rastrelli. 一七〇〇～七六）が大活躍をした。この人もロシアへやってきたイタリア人彫刻家の子。ラストレリーの建築はバロック様式で、キエフの聖アンドレイ教会を見ればわかるが、ごてごてと重たい感じの装飾性が目立つ。ペテルブルグ郊外のペテルゴフの離宮は、数々の華麗な噴水もふくめて全体がごてごてした劇場なようだ。もつともかれの傑作とされるペテルブルグのスモーリヌイ女子修道院の装飾はかるやかさがある。スモーリヌイはロシア的口ココだと言う人もいる。

皇族の住まいである冬宮は一七五四年から建築がはじまる。

これも様式をいえば荘重なバロックなのだろうが、明るい。モスクワのクレムリンはもとも男たちのごつごつした城砦である。壁の厚いこと、出入り口の小さいこと。それに対してペテルブルグの宮殿は、広い空間に比較的低い三階の建物が横に長く延びる優雅な姿である。大きいのが重苦しくはない。水彩絵の具を塗ったような白と水色の外壁、高く明るいガラスの窓、ひだの多い白いカーテン、広く明るい階段。全体に装飾性が豊かだ。屋内は金と白がふんだんに使われ、屋根にまでたくさんの彫像がかざられ、いかにも華やか。それらの彫像は、ロシア正教の聖人や天使ではなく、西欧の古典古代の神話の登場人物たちである。

ストロガーノフ宮殿、南のツァールスコエ・セロー（皇帝の村。ソ連時代「プーシキン」）の夏用の宮殿などもふくめて、華麗な建築群が女帝たちの時代に次々と姿を見せてきた。黒い修道士や軍隊の隊列ではなく、女官の馬車やカーニヴァルのパレードの似合う都が姿を現した。そしてその宮殿には数々の美しい西欧の工芸品や美術作品が集められた。

たしかに、フランスかぶれの貴族文化はロシア全体から見ればほんの一部分の人たちのものだ。だが、それに匹敵する民衆文化が当時のロシアにあったかという、ないと答えるのがよいだろう。エカテリーナ二世時代にはプガチョーフの大農民反乱（一七七三～七五）が起きている。民衆は、まれに大規模な

反乱や宗教的抗議で荒々しく声をあげるくらいで、黙って働いているだけだった。宮廷貴族文化と民衆の生活とのあまりに大きな落差、絶望的な懸隔、それが十九世紀後半に至るまでのロシア社会の特徴だと言つてよい。

二十世紀になつてもその落差の影は消えなかつた。平等を謳つた「労働者と農民」の国ソ連も中間層を生み出し得なかつたと言つと、日本人は信じないかもしれないが。

先日日本の新聞に、いまのロシアの知的ミステリーの作家、ボリス・アクーニンが紹介されていた。アクーニンは、知的ミステリーを書き始めた動機をこう語つている。

「エリート層と大衆層しかなかつたロシアですが、この一〇年の間に出てきた中間層が、新たな文化、新たな知的娯楽を求めると感じたのです」

まゆつばのような話だが、知的娯楽を求める階層が、ソ連崩壊後一〇年余経つて、ようやく現れてきたというのである。

12. ロシア女性のフランスあこがれ

ロシアにとってイギリスは実用技術の先進国だった。実用本位できた西欧からの技術の導入吸収が、この女帝たちの時代に非実用文化の輸入に変わった。輸入品目が、造船や運河掘り関連に加えてファッションや「教養」関連のアイテムがふえた。

ロシア上層社会は、油くさい工具店イギリス屋を出て、明るいブティック・フランスへ入つていった。

それ以来ずっと文学も思想も芝居も服装も髪型も口紅も香水も、フランスが高級ブランドである。フランスはロシアの文化的宗主国である。帝政ロシア社会の上層部は、家庭においてさえフランス語だった。エカテリーナ二世の孫であるアレクサンドル一世は、ロシア語はうまく話せなかつた。ロシアで生れ育つても、複雑なことはフランス語でしか言えないロシア人がたくさんいた。

一七六五年にエカテリーナ二世は建築家モットに命じて、公務の場である冬宮に接して私的な住まいとして「エルミタージュ（隠れ家）」を建てさせた。玄関を、裏のネワ川側につけさせた。彼女は晩になるとこの「隠れ家」で、親しいインテリや恋人たちを招いて、おしゃべりやダンスを楽しむ。そこではへわたしはロシアの家庭の女主人ですよ〜ということにして、そういう役を演じて、集まった客たちもロシア語で話すことにした。フランスかぶれから生まれた「ロシアごっこ」である。

上のなさることを下もまねる。ねこも杓子もフランス語を学ぶ。競つてフランス人の家庭教師を雇う。地方の貴族の家で、住み込みフィンランド人教師がフランス語だと称して何年間もロシア人のこどもにフィンランド語を教えていたという話もある。モリエール級の喜劇だが、ほんとの話だという。エカテリーナ時代にロシア人が読んでいた本の四分の三がフランス語の

本だった。

だから、十八世紀末から十九世紀初頭の、カラムジンやプーシキンをはじめとするロシア知識人は、ロシア語を創らねばならなかったのである。エイヘンバウムの名著『レールモントフ』は、かれらのロシア語散文創出の苦しい試行錯誤をよく描いている。

一八六六年の『賭博者』という小説でドストエフスキーは、ロシアとフランスの関係は煎じ詰めればロシア女性のフランス男性へのあこがれである、と言っている。外見の美しいもの、優美なものに対するロシア女性のあこがれ、それこそが両国の関係の基礎である。中身は通俗でもかまわない、外見やしぐさがすてきでさえあれば、ロシア女性はうっとりしてしまうのだ、という。

エカテリーナ二世はもともとドイツ人だが、美術工芸品がたいへん好きだった。ドストエフスキー流に見れば、きれいなもの、すてきなものへのあこがれには抵抗できなかったかもしれない。

エカテリーナは国内ではさまざまな税によって民をしばりあげ、外国の（主としてオランダの）銀行からは莫大な借金をして、美しい文化の舞台を演出した。銀本位制であったのにエカテリーナは紙幣をこしらえて、どんどん紙幣を発行して、政府として使える金を作った。そのために、一銀貨ルーブリが二三

紙幣ルーブリにも相当するほどにもなった。この二重貨幣システムは後々までロシア人のお金の計算に影響を与えている。たとえば、司祭が教会を建てるので教区の檀家である金持ちに寄付をお願いに行く。檀家の人は司祭の差し出した奉加帳に一〇〇ルーブリ寄付しますと記帳した。記帳したその人は紙幣ルーブリのつもりだったのに、寄付してもらった司祭さんは銀貨ルーブリだろうと期待する、などということが実際に生じた。

13. カラムジンのパリ詣で

十八世紀末から十九世紀初頭に活躍したロシアの文学者・歴史家カラムジンは一七九〇年の日記に、パリと聞くと「心臓がどきどきした」と書いている。

「心臓がどきどきした。パリだ。これこそ何世紀にもわたって全ヨーロッパの手本であった都市、趣味と流行の源泉だ。私はパリの名前を、自分の名前とほとんど一緒に知った。パリについては小説の中でたくさん読んだし、旅行者から聞いたし、夢に見たし、考えもした。ほら、パリだ！ 目に見える、これからその中へ入るのだ！ おお、わが友よ！ この瞬間は、私の旅の中で最も楽しい瞬間の一つだった！」（三月二七日）

「私はパリにいる！ この思いは私の心の中に、ある特別な、説明することのできない、快い動きを呼び起こす。……私はパ

りにいる！」(四月二日)

一七九〇年、フランス大革命の時代である。しかし、カラムジンの日記からは革命のにおいはしない。「危険思想」はその気配もなく、あこがれが一杯である。(日記が発表されたのはアレクサンドル一世の時代になってからだから、検閲のフィルターが「危険思想」を除いたのだと考えなくてもよいだろう。またカラムジンの『ロシア人旅行者の手紙』が現地視察の記録ではなく、一種の創作であるということは、むしろパリ讚美の定型化が起きていたことの裏づけになる。) 日記にはパリのカフェ、アカデミー・フランセーズ、ヴェルサイユ、パリの郊外の村などについての讚美が連なっている。

14. 体制を批判する知識人の誕生

エカテリーナ二世が自分の政治理念を謳いあげた『訓令(ナカース)』は、ほとんどがフランスの啓蒙思想家たちの本からの引き写しである。そこで彼女は「ロシアはヨーロッパの国家である」と宣言している。ロシアはロシアだったのに、「わたしたちはヨーロッパ人なのよ」と言ったのである。これはピョートルには必要なかったアイデンティティの宣言だった。ロシアの百姓は見捨てられた。

エカテリーナ二世はブティック・フランスで、当時の流行の

啓蒙思想という抽象的な品物までお買い上げになった。そしてその制作者たちと文通をし、実際にデイドロをペテルブルグに迎えたりもした。光をもたらす思想、啓蒙思想が入ってきた。ヴォルテール、モンテスキュー、デイドロ、ルソーと、暗い体制を批判する視点が、自由主義、理性尊重の考えが、革命の火薬となりうる思想が、採り入れられた。女帝が率先して導入して、それが広まる雰囲気を作り、優秀な青年たちをヨーロッパに留学させたりした。

そして自分たちはヨーロッパに属す者だと上から文化的帰属を決定されたことが、十九世紀のインテリの「われらは何者なりや」というやっかいな「自分探し」をうながし、「自分探し」と重なる真実追求傾向から、ロシア知識人という観念的種族が発生してくる。

15. 啓蒙思想は禁止

フランス革命が起きて、下手をするとロシアに飛び火もありうるとわかった。すぐにエカテリーナ二世は、自分が愛したのには「古きフランス」であって、革命のフランスではないと周囲にはつきり示した。判断が早い。この時期彼女は、フリードリヒ・グリムという、サロンのニュースを提供する役目の寵臣に宛てた手紙で、“*Jaime naturellement les Anglais*”などと書き送っている。

そういうわけで、社会制度批判、宗教批判等々を生み出すフランス啓蒙思想は、今度は禁じられることになる。空腹な若者の目の前においしいごちそうを持ってきて、ちよっと味見するだけですよ、舶来屋さんの仕出し料理はおいしいけれど、うちのごはんはまずいなんてことを言っただけじゃいけませんよ、というやり方である。

しかし、新しい「真理」を知った若者たちは、禁じられればなおのこと、真理のりんごを求めないではいられない。フランス啓蒙思想を学んで理想と現実のあまりのギャップに悩むラヂーシチェフ（一七四九―一八〇二）が出てくる。体制の中から少数の体制批判者としての知識人が、誕生してくる。ロシア・インテリゲンツィヤである。そして政府はそれを危険人物とみなして弾圧する。ラヂーシチェフは自殺に追い込まれた。

ドストエフスキーもそのインテリゲンツィヤの系譜につらなる。かれは一八四九年に西欧の自由思想を宣伝したという疑いで逮捕された。その裁判で次のように釈明し抗議している。

「いかなる理由で私は罪ありとされたのでしょうか。私が政治やヨーロッパや検閲などについて語ったからでしょうか。だが現代において、それらの問題について考えず語らない人がいるでしょうか。・・・ヨーロッパこそは、われわれに学問、教養、ヨーロッパ文明なるものを与えてくれたのです。ときどきヨーロッパについて、あるいは政治的事件について語り、現代

の書物を読み、ヨーロッパの動向に注目し、その動きを研究する、それだけの好奇心を持っているということ、われわれは非難されるのでしょうか」

16. 秘密結社と聖なる真理

それからずっとロシアでは、西欧の学問、思想は、秘密結社の雰囲気の中で受け入れられることになる。そのためにその舶来思想は、受け止める側にとっては、ふつうの世俗社会の学説ではなく、新しい宗教の教義のような、新たに啓示された神聖な真理のような色合いを帯びがちだった。

知識や理想の受容が秘密結社の雰囲気と結びつく傾向は、フリーメーソンの運動とも結びついている。エカテリーナ二世時代、そしてアレクサンドル一世の時代も、禁止にもかかわらずロシアのフリーメーソンは盛んである。トルストイの『戦争と平和』はアレクサンドル一世時代を扱っているが、そこにもフリーメーソンのことが出てくる。

これにはイギリスがからんでいる。一七二八年、ジェームス・ケイス（James Keith）という人物がイギリスからロシアへフリーメーソンの組織をもたらし、各地に支部、ロッジを設立した。フランス、ドイツからも入ってきたが、イギリス系統が広がり、ロンドンのグラランド・ロッジと密接な関係が保たれ

る。

ロシアではデカブリストをはじめとしてたくさんのフリーメイソンが知られている。特に有名なのはノヴィコフ（一七四四〜一八一八）。出版活動などを通してロシアにおける啓蒙運動を展開した。かれはロシアのデイドロとも言われる。現行体制を批判し改革を望む貴族たちはフリーメイソンというかたちで連帯していった。

★ヤーコブ・ベーム

それから、これはもうロシア思想史の話になるが、ロシアは知識層の間にも世界救済神話が根強く残っていた国である。千年王国思想、ミレニアム思想の盛んな社会である。

ヤーコブ・ベーム（一五七五〜一六二四）の神秘主義こそはロシアの哲学のはじまりであったという学者もいる。一六八九に、ベーム信奉者の神秘家クルマン（一六五一〜一八九）がモスクワ郊外のドイツ人居留区へ招かれて来て、ロシア人の間にも支持者が生れる。クルマンは最後はモスクワで火あぶりの刑にかけられてしまうが、かれが伝えたベーム流の終末論的神秘主義は、ロシアのキリスト教に内在していた終末待望の気運と結合し、宗教的異端セクトから理想主義的知識人まで、ロシア社会のさまざまなレベルの宗教的想像力の源となった。ロシアの民衆とインテリを分ける溝は知識においても生活においても深く幅も広いが、しかし宗教的想像力においては互いに共鳴

するところがある。エカテリーナ二世時代に啓蒙主義が入ってきたと言ったが、その孫のアレクサンドル一世時代、十九世紀初頭は、神秘主義の花盛りである。啓蒙の光は社会の表面に差しただけであった。ロシアの土壤は神秘主義愛好の土壤であったことを感じる。

十九世紀前半のシェリングの哲学にしても、ロシア青年はシェリングをベームの後継者、新しい予言者として受け入れた。そして政府は「キリストに代えるにシェリングをもつてしている」という理由でモスクワ大学でのシェリング哲学の学習を禁止した。ドイツは、神秘主義、観念論哲学、敬虔主義（ピエティスム）など、宗教的な想像のための核をロシアに提供してくれた。

参考文献

- 1 N.M.Lary, *Dostoevsky and Dickens. A Study of Literary Influence*.1973.
И.Карарский, *Диккенс в России*.1966.
W.J.Leatherbarrow ed., *Dostoevskii and Britain*. 1995.
- 3 Энциклопедический словарь. Изд.Ф.А.Брокгауз и И.А.Ефрон. т.22. 1894 (『フロックガウス・エフロン百科事典』第三卷 一八九二年「鉄道」)
小池滋『チャールズ・ディケンズ』(28,50)

- R.Auty ed. *Companion to Russian Studies. vol. 1*, 1976. (218)
- D. Betha, *The Shape of Apocalypse in Modern Russian Fiction*, 1989. (57)
- 4 T.オーウェン (野口・栖原訳) 『未完のブルジョア——帝政ロシア社会におけるキリスト教商人の軌跡』
- 『ブロンツァウス・エフロン百科事典』第五四卷「ロント」 (231ff., 327ff.)
- R.Auty ed. *Companion to Russian Studies vol. 1* (157f.)
- 5 *Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History* (British-Russian Relations to 1725)
- Н.П. Михальская. *Образ России в англйской художественной литературе* 11-19 вв.
- E. Simmons, *English Literature and Culture in Russia* (1553-1840)
- 6 田中陽児他編『ロント史 Ⅰ』(255)
- E. Simmons, *English Literature and Culture in Russia* (1553-1840)"
- 7 J. Billington, *The Icon and the Axe*.
- E. Simmons, *English Literature and Culture in Russia* (1553-1840). (31, 96, 98)
- 8 E. Simmons, *English Literature and Culture in Russia* (1553-1840).
- 9 E. Simmons, *English Literature and Culture in Russia* (1553-1840).
- 11 R.Auty ed., *Companion to Russian Studies vol. 3. An Introduction to Russian Art and Architecture*.
- J. H. Billington, *The Face of Russia*.
- 「朝日新聞」二〇〇一年一月二五日
- 12 R.Auty ed. *Companion to Russian Studies. An Introduction to Russian Studies*. (157.)
- 田中他編『ロント史 2』(112, 137)
- E. Simmons, *English Literature and Culture in Russia* (1553-1840) (75)
- 13 カラムジン『ロシア人を見た十八世紀パリ』福住誠訳
- 藤沼貴『近代ロシア文学の原点——ニコライ・カラムジン研究』
- Anthony Cross, *Anglo-Russian*
- 15 T. Riha ed. *Readings in Russian Civilization. vol. 2*
- トントク『ロント・インナリヤンニヤ』
- J. Billington, *The Icon and the Axe* (222)
- E. Simmons, *English Literature and Culture in Russia* (1553-1840) (87)
- 16 ベリヤコフ編『ドストエフスキー裁判』(81f.)
- E. Simmons, *English Literature and Culture in Russia* (1553-1840). (95)
- J. Billington, *The Icon and the Axe*